



第4回写真「1_WALL」展

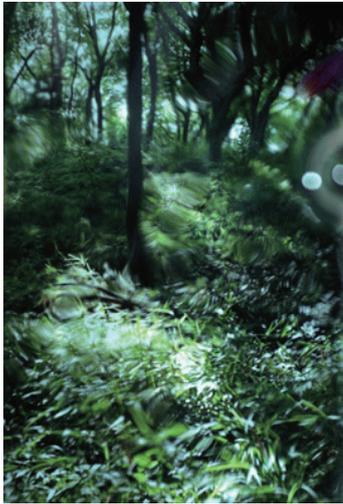
2011年4月4日(月)～4月28日(木)

公開最終審査

2011年4月7日(木) 6:00p.m.～8:30p.m.

イメージの視覚化に挑み、鋭い美的感覚が注目されてグランプリに！

写真を水槽に沈めて撮影し、その写真を更に複製した作品を展示。ポートフォリオや展示のクオリティの高さと個展への期待がグランプリに繋がった



受賞作 「submerge garden」

ある日、世界が水に沈んだらどう見えるんだろうと思った。なぜそうなのかわからないけど多分、そういう圧迫感みたいな物を感じていたんだと思う。



審査員コメント

金村修

展示を見たところでは、一番いいと思った。すごくきれいだし、単純に見ているだけで気持ちがいい。次の作品を見てみたい。

鈴木理策

言葉で置き変わりきらないところに写真を持っていこうとしているところがおもしろい。写真の中に写りこむものをどこまで幅を広げて魅力あるものにできるかが勝負だと思う。

鳥原学

今ある世界を置き換えて、どこか奥の方へ行こうとする方向性はわかる。手を離そうとしていても本人の強い香りみたいなものが残っているところが、雰囲気があってよかった。

町口覚

この写真は見せ方が難しいと思ったが、フックもよかったし、展示もうまかった。ちゃんと自分の世界を持っている人だと思う。

光田ゆり

美的な感覚にすごく魅力がある。やっていることは感覚的だけど、何かの本質に近づいているように見える。もう少し突きつめていけば、それが何か見えてきそうな予感がする。



畑 直幸 Naoyuki Hata

1979年岐阜県生まれ。

2000 中日美容専門学校夜間部卒業

2001 岐阜経済大学経営学部産業経営学科卒業

2008 東京写真学園卒業



FINALISTS ※五十音順

飯塚修太
岡田希更
斉藤麻子
畑 直幸
三野 新
山下隆博

JUDGES ※五十音順、敬称略

金村修 (写真家)
鈴木理策 (写真家)
鳥原学 (写真研究者)
町口覚 (アートディレクター)
光田ゆり (美術評論家)

■ 出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略



山下隆博 Takahiro Yamashita

「奇跡の傍らで眠る」



この作品を撮り始めたきっかけは、故郷の姿を残しておきたいという思いから。私の故郷(北海道)には原子力発電施設がある。原発事故や両親の離婚など、絶対に起こるはずがないと思っていたことが、実際には起こりうる。だから忘却する前に、その姿を写真でドキュメントする。

〈質疑応答〉

- 光田: 写真の中の原子力発電施設は小さくて、だからこそリアリティを感じるの?
- 山下: 故郷にいた頃は施設のある風景が普通だったが、離れてみて違和感を覚えた。
- 鳥原: 一年後の個展も故郷に帰って同じように撮るの?
- 山下: 最初は原発の写真を撮ろうと意気込んでいたが、5年くらい撮ってきて、今は原発に囚われず好きなように撮ろうと思っている。
- 鈴木: 福島原発事故の後、あなた自身も原発の存在に対して賛成なのか? 反対なのか?
- 山下: 昔、施設の近くに住んでいた人間としては、生活の基盤があるので、一概に反対できない。



斉藤麻子 Asako Saito

「Unconformity」



地層や岩石が地上に露出する“露頭”を撮っている。今回展示した写真の露頭は、今から400万年~1200万年前の地質時代に形成されたもの。露頭の写真を数多く提示することで、これまで私たちが経験したことのない天変地異が起きて起こったことを知らしめたかった。

〈質疑応答〉

- 町口: 展示作品を2点に絞った理由は?
- 斉藤: 初めて露頭を見る人にわかりやすいような典型的な露頭の写真を選んだ。
- 鈴木: なぜライトパネルにして展示したの?
- 斉藤: 現像から上がったネガをライトボックスで見たとき、すごく興奮したので。
- 光田: 今後についてはどんなことを考えているの?
- 斉藤: この写真は資料価値があるので、数多くの場所を撮りたい。活断層なども撮りたい。



畑直幸 Naoyuki Hata

「submerge garden」



ある時、突然、世界が水に沈んだらどうなるのだろうと思った。なぜそう思ったのかわからない。常にそういう圧迫感を感じていたのだと思う。この感じを視覚化するために、写真を水槽に沈めて、そこに魚を泳がせて撮った。その写真を部屋に貼って、また撮った。

〈質疑応答〉

- 菅沼: 個展ではどんな空間を作ろうと思っているの?
- 畑: 見るとか見てとってかかってどうということなのか、今自分は何を見ているのかということにすごく興味があるので、そういうことを意識した空間づくりを考えたい。
- 光田: 世界が水に沈むということと、写真を水に沈めるというのは違うと思うの?
- 畑: 自分のイメージを視覚化するための手段。作品は自分のイメージに近かった。
- 金村: 発想は良いと思うが個人的な美意識に留まっている。人前で写真はこうだ! というくらい考えを持って発言してほしい。



岡田希更 Kisara Okada

「東京、なう」



東京に住んで“あっと思った瞬間”や“感動を覚えた瞬間”を毎日、撮っている。私が撮影していることを分かってもらうために50ミリの単焦点レンズを使用した。それは撮影されるのが嫌な方は逃げてというメッセージでもある。人が集まる場所、東京の今を切り取りたい。

〈質疑応答〉

- 菅沼: タイトルの「東京、なう」の意味は?
- 岡田: 東京を転々として撮影していて、なんだかツイッターに似ていると思ったので。
- 町口: 毎日、写真を撮っているの?
- 岡田: 3年前から毎日、東京を撮っている。デジカメでパシャパシャ何枚も撮る。
- 鳥原: 撮影した膨大な写真から展示作品を選んだ理由、50ミリの単焦点で撮る理由は?
- 岡田: インスピレーションで選ぶ。人の視界に一番近いレンズだと聞いたから。



三野新 Arata Mino

「Play #01 ~写真の戯曲~」



写真を“記録”や“結果”ではなく、“行為”として捉える。つまり、演劇の公演記録としてのみ機能する舞台写真ではなく、撮影行為によって逆にパフォーマンスを生み出そうと考えた。演出を施した大小3点ずつの写真をインスタレーションとして展示した。

〈質疑応答〉

- 町口: 作品の構想から演劇パフォーマンスを経て写真として完成するまでの期間は?
- 三野: 10か月くらいかかった。
- 光田: あなたが演出したパフォーマンス自体に撮影行為は組み込まれているの?
- 三野: はい。演劇を写真でモニターージュして、それを基に再度パフォーマンスに落とし込んでいる。



飯塚修太 Shuta Iizuka

「Dust on the Sheets」



生活していく中で見たものや感じたものを撮っている。作品には実像を撮った写真と、以前に撮った写真を複写したものがある。ポートフォリオの中の写真をわら半紙にコピーし、床にフライヤー風に並べて展示した。1点ものように見えるポートフォリオとの見え方の違いがおもしろいと思った。

〈質疑応答〉

- 光田: 写真に写っているものを説明してもらえます?
- 飯塚: モニターに映っている空など、いろいろ。被写体はどうでもいいのかもしれない。
- 鈴木: どうでもいい被写体の中で、最終的に写真を選んでいる基準は何?
- 飯塚: まず、たくさん撮る。その中から予想外の撮り方をしているものを選んでる。
- 鳥原: あなたにとって撮影現場は、どういう意味があるの?
- 飯塚: 見たことのないものが写ればいいという好奇心をもって撮影している。

■審査員の感想

ファイナリスト全員のプレゼンテーションが終わり、菅沼さんの進行で各審査員が全体の感想を述べることに。まずは、町口さん：「みんなポートフォリオはすごく良かったが、展示を見てあまりピンとこない。もっとみんな、自分の言葉で説明したほうがいい。それから偶然だと思うが、原発の写真や水没した写真、地層の写真が集まり驚いている」。次に、鳥原さん：「今回の審査はかなり難しい。二次審査と最終審査の間に、世の中に変化があり、いやがうえにも写真の見方が変わる。そんな中で今日は心に響くプレゼンテーションが聞けるかと思ったがそれがなかった」。金村さん：「展示はイマイチ。ポート



フォリオのほうが面白かった。作品を人前に提示するとき、何も考えていない人が多すぎる。写真のセクションとか、もっと意識的にすべきだ。光田さん：「私は今回の展示は、むしろ面白く見ることができた。震災の前と後とはいろんな状況が変わったと思うが、こういう場ではできる限り自分の言葉で説明すべき。そうしていかないと次に行けない」。そして最後に、鈴木さん：「撮影した写真をモノとしてもう一度扱って見せていく手法が多かった。何回か見てきたけど、ちょっと変わってきた感じがする」。

引き続き、ファイナリスト一人一人についての議論が行われた。○山下さんの作品について。光田さん：「この人は写真を感覚的に撮る人ではない。時事的な問題と向き合いながら、ドキュメンタリーとしての写真を撮り続けるスタンスには好感が持てる。今日の展示はやや平凡だったが、写真は良かった」。金村さん：「写真は悪くないけど、何か物足りない」。鳥原さん：「こういう作品は作者が提示した文脈、見る側が引き受けて見るもの。そういう意味ではタイミングが良かった。しかし個展は一年後なので、その時にこのテーマの写真を見たかどうか」。鈴木さん：「彼のスタイルは良く分かる。4×5の写真の特性を活かす大きなプリントにすればもっと伝わったのでは」。○畑さんの作品について。光田さん：「詩的な感覚で魅力的な作品。展示もアピール力がある。感覚的だけど、何かの本質に近づいている気がする。突き詰めていけば、もっと面白くなりそう」。金村さん：「気持ち良い展示、一番良かった。次の作品を見て見たい」。鳥原さん：「写真を燃やしたり、水没させたり、速くへ行こうとしている姿勢が評価できる。彼が言う“世界の圧迫感”がよく分かる」。町口さん：「このタイプの写真は見せ方が難しい。ポートフォリオも、展示も見せ方としては面白い、うまい。ちゃんと自分の世界が出ている」。○三野さんの作品について。鳥原さん：「説明は良く分からないが、やることへのパワーがすごい。見たい

という気はする。覚悟だけは感じられる」。町口さん：「ポートフォリオは良いのに、展示を見てガッカリした。もっと真っすぐ行けばいいのと思う」。金村さん：「この人は存在に悪意があるから、あまり考え過ぎなくてもいいのに」。鈴木さん：「夢見がちで、強引なところは面白い」。○斉藤さんの作品について。町口さん：「1000カット撮って、そのうちの65枚でポートフォリオを作り、写真を2枚展示する基準がよくわからない。この人は単に露頭が好きなのではないか。見る側が歩み寄って楽しみを探し出さなければならぬ写真だと思う」。金村さん：「普通なら絶対に入れないトラックが写り込んでいたりするところが面白い。本当は露頭が好きで撮っているのではなく、シャッターを押すきっかけにすぎないのでは？」。鈴木さん：「露頭がフォトジェニックな風景になると知って、撮り始めたんだと思う。それが見る人にバレてしまっている。写真は作者の意図を越えて面白い。さらに地震後、タイムリーなテーマになっている」。○岡田さんの作品について。光田さん：「すごく迫力のあるスナップ。撮影者のエネルギーが伝わってくる。話を聞いても、力が入っているところが良い。何か伝えたい、スタイルを作りたいというのは別の意図がある」。金村さん：「写真はうまい。だが、人を撮るというより、背景に目が行っている。だから躍動感がない写真になっている」。町口さん：「名作写真のオンパレード。一枚一枚はうまいのに」。鈴木さん：「パターンのある写真。この写真の生まれてきた経緯を考えると、今までの見せ方の形式に合わせなくてもいいと思う」。○飯塚さんの作品について。町口さん：「プレゼンテーションの口数は少なかったが、ポートフォリオは良かった」。鈴木さん：「同感。ポートフォリオは良かったが、展示はそれを引きすぎた」。光田さん：「やりたいことは、よく分かる。ポートフォリオのコンセプトや洒落た感じが面白かった。展示はキメキメでなく、又ケ感があって肯定したい」。金村さん：「ポートフォリオは面白い。手元の小さいサイズではうまいけど、大きな空間を使いこなせていない。イメージだけでやっているから、写真の物質性をつかんでいない」。鳥原さん：「ポートフォリオがプロセスだとすると、結果だけが展示になってしまった感じ」。

いた。展示はキメキメでなく、又ケ感があって肯定したい」。金村さん：「ポートフォリオは面白い。手元の小さいサイズではうまいけど、大きな空間を使いこなせていない。イメージだけでやっているから、写真の物質性をつかんでいない」。鳥原さん：「ポートフォリオがプロセスだとすると、結果だけが展示になってしまった感じ」。



■審査員による投票

ファイナリスト一人一人に対して意見交換の後で、各審査員にグランプリ候補を2名ずつ投票してもらった。その結果は……

- 金村/畑 飯塚
- 鈴木/三野 斉藤
- 鳥原/山下 畑
- 町口/畑 飯塚
- 光田/山下 畑

集計した票は、畑4票/山下2票/飯塚2票/三野1票/斉藤1票

ここで鳥原さんから「1票ずつ入った三野さんと斉藤さんの応援演説を聞きたい」との意見があり、それぞれに投票した鈴木さんが「三野さんが個展で発表したいと力説する心霊写真を見てみたいと思った。一方、斉藤さんは、いまタイムリーなテーマだし、仕事の量も多いからおもしろい写真もいっぱいあると思う」と票を投じた説明をする。しかし他の審査員の気持ちは揺らぐ。この先は畑さん・山下さん・飯塚さんの3人に絞って議論することになった。進行の菅沼さんが各審査員に応援演説を促し、町口さんが「ポートフォリオと展示にブレがない畑さんと、ポートフォリオが抜群に良かった飯塚さんを推したい」と先陣をきる。金村さんは「一年後に個展を見たいという点では畑さんと斉藤さん」。光田さんは「震災後の審査ということ考えると、原発の写真を撮った山下さんと、水没の写真を撮った畑さんのどちらかの個展が見たい」とそれぞれ2人ずつを推す。鳥原さんも「震災後のメンタリティとしては、山下さんの個展を見てみたい。同じ理由で畑さんの写真も社会的な文脈の中で見てみたい」と発言。これを受けて菅沼さんが「この3人の中から1人を選んでください」と提案。金村さんが畑さん、鈴木さんが飯塚さん、鳥原さんが山下さん、町口さんが畑さん、光田さんが山下さんを推す。集計すると、山下さんと畑さんが2票ずつで並んだ。そこで、どちらにも投票していない鈴木さんに3つ投票してもらうことに。鈴木さんは長考の末、「畑さん」と表明。菅沼さんが「第4回『1_WALL』のグランプリは畑さん」と宣言すると、満員の会場から大きな拍手が起こる。畑さんが「ありがとうございます。一年後に新しい写真を提示できるよう、がんばります」と挨拶して公開最終審査を締めくくった。



■出品者インタビュー

山下隆博さん：とてもスリリングな審査でした。結果は残念でしたが銀座で作品を展示できるのは幸せです。ドキュメンタリー写真をずっと撮り続けたいと思っているので、3.11の地震の8日後、福島の被災地に取材に行ってきました。今後のテーマに加えて撮ってみたいです。

畑直幸さん：グランプリをいただき、すごくうれいいます。誰かの前でプレゼンテーションするのは初めての経験でしたが、今後は「公共の場で発言する」という意識を強く持ちたいと思いました。今は写真関連のいろんなプロジェクトが並行して進んでいます。その中で一年後の個展開催は、ひとつ楽しみが増えた感じですが、全力でがんばりたいと思います。

三野新さん：すごく勉強になりました。審査員の方のいろんな意見を間近で聞くことができてよかったです。「ここまで言われるか」というような、かなり厳しい意見もありましたが、前へと進む糧にしたいですね。この結果を次に活かせるよう、しっかりやらねばと思いました。

斉藤麻子さん：グランプリに届かなかったのは残念でしたが、鈴木さんに1票入れてもらえてうれしかったです。ポートフォリオと展示には自信があったのですが、伝えるようにプレゼンテーションすることの必要性を痛感しました。これが年齢的に最後の「1_WALL」挑戦でした。

岡田希更さん：残念な結果です。作品のコンセプト、セレクト、展示、すべて私にとってベストのつもりでした。しかし、まだまだということですね。今まで独りよがり満足していたので、これからは他の人と協力して良い作品をお見せできるよう、全力を尽くしたいと思います。

飯塚修太さん：グランプリ候補の3人に残って、ありがたかったです。結果は一歩及びませましたが、スッキリした気分です。いろいろと勉強になりました。今後には必ず活かせると思います。この先ですか？ 相変わらず好奇心に任せて、マイペースで撮ってみたいです。

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>